

Title	表情表出による情動調整が受け手の情動と対人印象判断に及ぼす影響：不一致表出に着目して
Author(s)	野口, 素子; 吉川, 左紀子
Citation	対人社会心理学研究. 2010, 10, p. 147-154
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8622
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

表情表出による情動調整が受け手の情動と対人印象判断に及ぼす影響¹⁾ 不一致表出に着目して

野口素子(京都大学大学院教育学研究科)

吉川左紀子(京都大学こころの未来研究センター)

表情表出による情動調整の1つである不一致表出(ある情動の経験時にそれとは一致しない情動価の情動を表出すること)が、受け手の情動や表出者に対する対人印象判断に及ぼす影響について検討した。20名の参加者に対し、男女各2名の表出者の表情表出映像(自然表出、不一致表出)を順に呈示した後、映像を見ているときの参加者自身の情動経験、表出者の情動および対人印象判断、表情の真実味について評定を求めた。その結果、男性の不一致表出による笑顔は偽りであると判断されやすく、参加者はよりネガティブな情動を経験し、相対的にネガティブな対人印象判断となった。一方で、女性の不一致表出による笑顔は、自然な笑顔と同程度に本当に表情らしいと判断され、参加者の情動経験や対人印象判断も差異がないことが示された。表情表出による情動調整が、部分的にポジティブな対人的機能を有し、良好なコミュニケーションに寄与する可能性が示唆された。

キーワード: 情動調整、不一致表出、情動表出、情動経験、対人印象判断

問題

情動調整(emotion regulation)とは、どのような情動を、いつ、どのように表出するのかを意識的・無意識的に調整することである(Gross, 2001, 2002; Kunzmann, Kupperbusch, & Levenson, 2005)。例えば、相手に対して怒りを感じても笑顔で話し続けたり、自分自身に嬉しいことが起きても友人が悲しんでいるときは喜びを抑えて一緒に悲しそうな顔をしたりする、などが挙げられる。情動調整は、他者との円滑な対人相互作用に必要な不可欠であり(Demaree, Schmeichel, Robinson, & Everhart, 2004)、私たちはこのような情動調整を日常的に絶えず行っている(Richards, 2004)。情動調整には多くの方略があるが、中でも、表情表出による情動調整は日常よく使われる方略であり(Richards, Butler, & Gross, 2003)、社会的相互作用に影響を与えるといわれている(Lopes, Salovey, Côté, & Beers, 2005)。特にこれらの方略が果たす機能を明らかにすることは良好な対人関係の実現にとって重要である。

本研究では、表情表出による情動調整の1つである不一致表出(expressive dissonance)に着目した。不一致表出とは、悲しいときにも笑顔を見せるなど、ある情動を経験したとき、それとは一致しない情動価の情動を表出することである(Robinson & Demaree, 2007)。これまでの先行研究では、不一致表出が表出者自身に及ぼす影響について検討されてきた。その結果、ネガティブ情動経験中にポジティブ情動表出をすることは、表出者の交感神経活動の増幅(Robinson & Demaree, 2007)や、主観的情動経験の増大、情動経験時の記憶低下(野口・吉川, 2007)を招くことが明らかとなった。不一致表出は、認知的負荷がかかりやすく表出者自身の精神的健康に悪

影響をもたらすと考えられる。

表情表出による情動調整が受け手の対人印象判断に及ぼす影響については、主に、表出抑制(expressive suppression)が検討されてきた。表出抑制とは、悲しいときに泣くのをこらえるなど、ある情動を経験したときに表情による情動表出を抑制することである(Gross, 2002)。Butler, Egloff, Wilhelm, Smith, Erickson, & Gross (2003)は、ネガティブな情動経験に関する2者間コミュニケーション場面において、一方が表情表出を抑制した場合、もう一方のストレスが増大し表出者に対する親密感が低下することを示した。また、質問紙調査からも、表出抑制が社会的サポートや他者との親密さ、社会的満足感の低下と関係していることが示唆された(Srivastava, Tami, McGonigal, John, & Gross, 2009)。

一方、不一致表出が受け手の対人印象判断に及ぼす影響に関してはこれまで検討されていない。不一致表出が表出者に及ぼす影響に関しては、表出抑制と同様の傾向が確認されたが、受け手の対人印象判断に及ぼす影響は、表出抑制と不一致表出では異なると考えられる。表出抑制は、表情表出が少ないため、表情から表出者の気持ちや意図を推測することが難しく、受け手にストレスをもたらしやすい(Butler et al., 2003)。しかし、不一致表出は、表出抑制と異なり、見かけ上の表情表出が低減しない。適切な情動表出がポジティブな結果をもたらすことは、これまでの先行研究からも明らかである。ポジティブ情動の表出は親和の形成と関連があり、対人印象がよくなることが示されている(Harker & Keltner, 2001)。また、社会的相互作用における情動の自己開示や相手の反応は、親密さの形成にとって重要であるといわれている(Laurenceau, Barrett, & Pietromonaco, 1998)。

したがって、不一致表出は、ネガティブ情動を感じていても笑顔を見せることで受け手にポジティブな気持ちをもたらしたり、ポジティブ情動を感じていてもネガティブな表情表出をすることで受け手と共感できたりと、表情表出が低減する表出抑制とは異なり、必ずしも対人的に悪影響をもたらさないかもしれない。また、痛み表出の研究では、表情表出は表出者の情動状態を推測する際に重要な判断材料となり、表情表出の受け手は、偽りの表情でもその表情表出の強さに応じた情動を推測することが示されている(Poole & Craig, 1992)。不一致の表情表出であっても、受け手は、表出された情動を推測したり感じたりするかもしれない。

本研究では、不一致表出をすることが受け手の情動状態や表出者に対する対人印象判断認知に及ぼす影響について調べた。実験参加者を受け手とし、自然表出、不一致表出の表情映像を見せて判断を求めるという方法で、表出者の影響を統制した実験を行った。

方法

実験参加者

大学生・大学院生 20 名、うち女性 12 名、男性 8 名であった(平均 20.7 歳、 $SD=1.3$)。

デザイン

2(表出者の表情表出: ポジティブ情動表出, ネガティブ情動表出) × 2(情動調整: 不一致表出, 自然表出)の 2 要因計画であった。表情表出の種類は参加者間要因、情動調整の種類は参加者内要因であった。

材料

実験装置 24 インチのデスクトップパソコン 1 台。

表出者映像 男女 2 名ずつ、計 4 名の人物動画を用意した(平均 21.3 歳、 $SD=1.0$)。各人物につき、ポジティブ情動の不一致表出と自然表出、ネガティブ情動の不一致表出と自然表出の計 4 種類の映像があった。いずれも時間は約 1 分で、音声はなかった。

これらの表出者映像は、ポジティブあるいはネガティブな情動喚起映像を視聴中の表情表出を撮影したものであった。使用された情動喚起映像は、Sato, Noguchi, & Yoshikawa (2007) より選出されたもので、ポジティブ情動喚起映像は主に楽しさ、ネガティブ情動喚起映像は主に怒りや嫌悪を喚起するものであった。不一致表出に関しては、情動喚起映像を視聴する際に、感じた感情とは逆の表情表出をするよう教示をし、意図的に表情表出を操作したものであった。映像はプロンプタを用いて撮影された。プロンプタとは、ハーフミラーを使用した映像呈示装置である。情動喚起映像がハーフミラーを通して呈示され、ハーフミラーの背後から映像視聴中の表出行動をビデオカメラで撮影した。男女 4 名ずつ計 8 名から、

予備調査により各条件の表情表出の強度や好ましさ・魅力度が同程度の人物 4 名(男女各 2 名)を選出した。

従属変数

表出者の映像視聴中の受け手の情動経験、表出者に対する情動推測および対人印象判断、表情の真実味についての評定であった。(a)受け手の情動経験: 6 情動語(怒り、驚き、悲しみ、恐怖、嫌悪、幸福)について、表出者の映像を見た際に参加者自身がどの程度感じたか評価した。いずれも 7 段階で評価した(0: 全く感じなかった ~ 6: 非常に強く感じた)。(b)表出者の情動推測: 同じく 6 情動語について、表出者である映像人物がどの程度感じていたと思うか評価した。いずれも 7 段階で評価した(0: 全く感じなかった ~ 6: 非常に強く感じた)。(c)表出者に対する印象: 大橋・三輪・平林・長戸(1974)を参考に、対人関係の構築と密接に関わると考えられる 6 項目(好ましさ、魅力度、利他性、信じやすさ、社交性、活動性)について、表出者である映像人物に対してどのような印象を持ったのかを評価した(1~7 の 7 段階、SD 法)。(d)表出者の表情の真実味: 表出者である映像人物の表情がどれくらい本当の感情を表していると思うか、7 段階で評価した(1: 非常に表れていない ~ 7: 非常に表れている)。この評定を表情の真偽の見抜きやすさの指標とした。

手続き

実験は個別に行われた。参加者はパソコン画面の前に座り、実験者は、実験の課題を指示するとき以外は参加者から姿が見えないよう参加者の横にあるついたての裏に座った。最初に、今回の実験ではある 4 名の人物映像が呈示され、各映像視聴中の参加者自身の感情経験、映像人物の感情および印象について評価してもらうことを告げた。そして、音声はないこと、1 人の映像時間は約 1 分であり映像全体から評価すること、映像は 1 度しか見られないこと、映像人物があなたと対面しておりその表情はあなた自身に向けられているとできるだけ考えること、と教示した。実験内容を理解してもらった後、練習課題を行った。練習課題では、約 30 秒の女性のポジティブな表情表出映像が呈示された。練習課題の後、男女 2 名ずつ計 4 名の人物映像を順に呈示した。参加者の半数にはポジティブ情動表出映像(ポジティブ情動の自然表出およびネガティブ情動の不一致表出)、もう半数にはネガティブ情動表出映像(ネガティブ情動の自然表出およびポジティブ情動の不一致表出)がそれぞれ男女 1 名ずつ呈示された。4 名とも異なる人物であり、男女それぞれ 2 名の人物のどの映像を使用するかはカウンターバランスをとった。1 名の人物映像を見終わるごとに受け手である参加者自身の情動経験、表出者の情動推測および印象について質問紙による評定を行った。人物映像の呈示順序、質問紙の順序は、いずれも参加者間でカウンターバラン

スをとった。4名全ての評価が終了した後、同じ映像が再度呈示され、映像人物の表情がどれくらい本当の感情を表していると思うかについて評価してもらうことを告げた。先ほどと同じ4名の映像を順に呈示し、1名見終わるごとに表情の真実味について質問紙による評定を行った。2回目の呈示順序も、参加者間でカウンターバランスをとった。

結果

受け手の情動経験、表出者の情動推測、印象、および表情の真実味の各評定に関して、自然表出と不一致表出で違いがないか検討した。なお、表出者の性別によって結果の傾向が異なったため、表出者の性別も要因に加えた。各従属変数に対し、ポジティブ情動表出、ネガティブ情動表出それぞれについて、各下位項目ごとに2(表出者の性別: 男性, 女性) × 2(情動調整: 不一致表出, 自然表出)の2要因分散分析を行った。多重比較は全てRyan法で行った。

受け手の情動経験

平均評定値およびSDを、ポジティブ情動表出、ネガティブ情動表出それぞれ有意差がみられた下位項目に限り、表出者の男女別にTable 1に示す。分散分析の結果、ポジティブ情動表出に関しては、表出者の性別 × 情動調整の交互作用が、怒り・嫌悪経験において有意($F(1, 18) = 5.41, 5.76, ps < .05$)、幸福経験において有意傾向であった($F(1, 18) = 3.97, p = .06$)。下位検定を行ったところ、男性表出者に対してのみ、怒り経験は有意傾向で、嫌悪経験は有意に自然表出よりも不一致表出の方が高く($F(1, 18) = 3.74, p = .07, F(1, 18) = 6.48, p < .05$)、幸福経験は自然表出の方が不一致表出よりも高い有意傾向がみられた($F(1, 18) = 4.05, p = .06$)。つまり、ネガティブ情動経験時にポジティブ情動を表出した

男性に対したとき、より怒りや嫌悪を感じ、幸福経験が低下する傾向がみられた。

一方、ネガティブ情動表出に関しては、表出者の性別 × 情動調整の交互作用が、怒り・嫌悪経験において有意($F(1, 18) = 7.99, 5.79, ps < .05$)、幸福経験において有意傾向であった($F(1, 18) = 4.06, p = .06$)。下位検定を行ったところ、怒り・嫌悪経験は、女性表出者に対してのみ、自然表出よりも不一致表出の方が有意に高く($F(1, 18) = 11.73, 4.89, ps < .05$)、男性の不一致表出よりも女性の不一致表出に対して有意に高かった($F(1, 36) = 4.64, 7.74, ps < .05$)。また、幸福経験において、男性表出者に対してのみ自然表出よりも不一致表出の方が有意に高く($F(1, 18) = 6.32, p < .05$)、男性の不一致表出の方が女性の不一致表出に対してよりも有意に高かった($F(1, 36) = 15.55, p < .01$)。つまり、ポジティブ情動経験時にネガティブ情動を表出した人物と対した場合、男性に対したときは幸福経験が高く、女性に対したときは怒りや嫌悪経験が高くなった。

表出者の情動推測

平均評定値およびSDを、ポジティブ情動表出、ネガティブ情動表出それぞれ有意差がみられた下位項目に限り、表出者の男女別にTable 2に示す。分散分析の結果、ポジティブ情動表出に関しては、表出者の性別 × 情動調整の交互作用が、悲しみにおいて有意($F(1, 18) = 4.48, p < .05$)、嫌悪において有意傾向であった($F(1, 18) = 4.01, p = .06$)。下位検定を行ったところ、悲しみは、女性表出者に対してのみ自然表出よりも不一致表出の方が有意に高く($F(1, 18) = 10.28, p < .01$)、男性の不一致表出よりも女性の不一致表出に対して有意に高く推測された($F(1, 36) = 8.58, p < .01$)。嫌悪は、男性表出者に対してのみ自然表出よりも不一致表出の方が有意に高く推測された($F(1, 18) = 4.85, p < .05$)。つまり、ネガ

Table 1 受け手の情動経験の平均評定値およびSD

情動	男性表出者				女性表出者					
	自然表出		不一致表出		自然表出		不一致表出			
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
ポジティブ情動表出										
怒り	0.30	0.48	1.30	1.57	+	1.10	1.79	0.40	1.26	
嫌悪	0.80	1.14	2.00	1.33	+	1.50	1.90	1.10	1.66	
幸福	2.10	2.13	1.10	1.20	+	1.20	1.48	1.60	2.01	
ネガティブ情動表出										
怒り	1.40	1.58	1.10	1.60		0.80	1.03	2.60	1.90	**
嫌悪	2.40	1.51	1.70	1.95		2.50	1.43	3.80	1.81	*
幸福	0.60	0.97	2.10	1.91	*	0.30	0.67	0.10	0.32	

注) * $p < .10$, ** $p < .05$, *** $p < .01$: 下位検定の結果、各有意水準で自然表出と不一致表出に差があることを示す。

Table 2 表出者の情動推測の平均評定値および SD

情動	男性表出者				女性表出者			
	自然表出		不一致表出		自然表出		不一致表出	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
ポジティブ情動表出								
悲しみ	0.40	0.70	0.50	0.53	0.70	1.06	2.20	2.20 **
嫌悪	0.70	1.25	2.10	1.91 *	1.70	1.42	1.30	1.95
ネガティブ情動表出								
驚き	0.70	1.34	1.80	1.40 +	2.70	1.89	2.10	1.66
悲しみ	1.20	1.48	1.50	1.78	5.10	0.99	2.90	1.60 **
嫌悪	2.60	1.71	2.10	2.38	3.50	0.97	5.20	1.03 *

注) * $p < .10$, + $p < .05$, ** $p < .01$: 下位検定の結果、各有意水準で自然表出と不一致表出に差があることを示す。

ティブ情動経験時にポジティブ情動を表出した場合、男性では嫌悪情動がより強く推測され、女性では悲しみ情動がより強く推測された。

一方、ネガティブ情動表出に関しては、表出者の性別 × 情動調整の交互作用が、驚き・悲しみ・嫌悪において有意であった ($F(1, 18) = 4.54, 6.56, 5.54, ps < .05$)。下位検定を行ったところ、驚きは、男性表出者に対してのみ自然表出よりも不一致表出の方が高く推測される有意傾向がみられ ($F(1, 18) = 3.80, p = .07$)、男性の自然表出よりも女性の自然表出に対して有意に高く推測された ($F(1, 36) = 7.94, p < .01$)。悲しみは、女性表出者に対してのみ自然表出の方が不一致表出よりも有意に高く ($F(1, 18) = 10.17, p < .01$)、また、自然表出、不一致表出どちらにおいても、男性表出者よりも女性表出者に対して有意に高く推測された ($F(1, 36) = 34.27, 4.42, ps < .05$)。嫌悪は、女性表出者に対してのみ自然表出よりも不一致表出の方が有意に高く ($F(1, 18) = 6.62, p < .05$)、男性の不一致表出よりも女性の不一致表出に対して有意に高く推測された ($F(1, 36) = 18.13, p < .01$)。つまり、ポジティブ情動経験時にネガティブ情動を表出した場合、男性では驚き情動がより強く推測される傾向がみられた一方で、女性では悲しみ情動はより弱く、嫌悪情動がより強く推測された。

表出者に対する印象

平均評定値および SD を、ポジティブ情動表出、ネガティブ情動表出それぞれ有意差がみられた下位項目に限り、表出者の男女別に Table 3 に示す。分散分析の結果、ポジティブ情動表出に関しては、好ましさにおいて、表出者の性別 × 情動調整の交互作用が有意傾向であった ($F(1, 18) = 4.19, p = .06$)。下位検定を行ったところ、男性表出者に対してのみ自然表出の方が不一致表出よりも有意に高かった ($F(1, 18) = 8.38, p < .01$)。つまり、ネガティブ情動経験時にポジティブ情動を表出した男性は、好ましさが低下した。

一方、ネガティブ情動表出に関しては、表出者の性別 × 情動調整の交互作用が、好ましさ・魅力度において有意 ($F(1, 18) = 5.19, 6.40, ps < .05$)、信じやすさにおいて有意傾向であった ($F(1, 18) = 4.33, p = .05$)。下位検定を行ったところ、好ましさは有意に、信じやすさは有意傾向で、男性表出者に対してのみ自然表出より不一致表出の方が高かった ($F(1, 18) = 5.17, p < .05, F(1, 18) = 4.03, p = .06$)。好ましさにおいては、男性の不一致表出の方が女性の不一致表出に対してよりも有意に高かった ($F(1, 36) = 11.92, p < .01$)。また、魅力度において、女性表出者に対してのみ自然表出の方が不一致表出よりも高い有意傾向にあった ($F(1, 18) = 3.95, p = .06$)。つまり、ポジティブ情動経験時にネガティブ情動を表出した場合、男性では好ましく信じやすいと判断され、女性では魅力が低下する傾向がみられた。

表出者の表情の真実味

平均評定値および SD を、ポジティブ情動表出、ネガティブ情動表出別に Figure 1 に示す。ポジティブ情動表出に関しては、交互作用が有意で ($F(1, 18) = 7.83, p < .05$)、下位検定を行ったところ、男性表出者に対してのみ、自然表出の方が不一致表出よりも有意に高く本当の感情を表出していると評価されることが示された ($F(1, 18) = 15.65, p < .01$)。つまり、男性は、ネガティブ情動経験中にポジティブ情動を表出した場合、本当の表情表出ではないと判断されやすかった。

一方、ネガティブ情動表出に関しては、男性、女性どちらにおいても、自然表出と不一致表出の間で有意な差はみられなかった。

表情の真実味と他の評定項目との相関関係 表情の真実味評定が他の評定項目と関連があるか検討するため、表情の真実味の評定値と、受け手の情動経験・表出者の情動推測・印象の各項目の評定値との相関分析を、情動表出の種類別(ポジティブ情動表出、ネガティブ情動表出)かつ表出者の男女別に行った。各評定項目との

Table 3 表出者に対する印象判断の平均評定値および SD

項目	男性表出者				女性表出者					
	自然表出		不一致表出		自然表出		不一致表出			
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
ポジティブ情動表出										
好ましさ	4.90	1.52	3.20	1.32	**	3.90	1.60	3.90	1.20	
ネガティブ情動表出										
好ましさ	3.20	1.14	4.40	1.90	*	3.00	0.94	2.50	0.53	
魅力度	3.50	1.08	4.30	1.70		4.20	0.92	3.20	1.40	+
信じやすさ	3.00	1.56	4.50	2.12	+	2.80	1.48	2.10	0.74	

注) * $p < .10$, + $p < .05$, ** $p < .01$: 下位検定の結果、各有意水準で自然表出と不一致表出に差があることを示す。

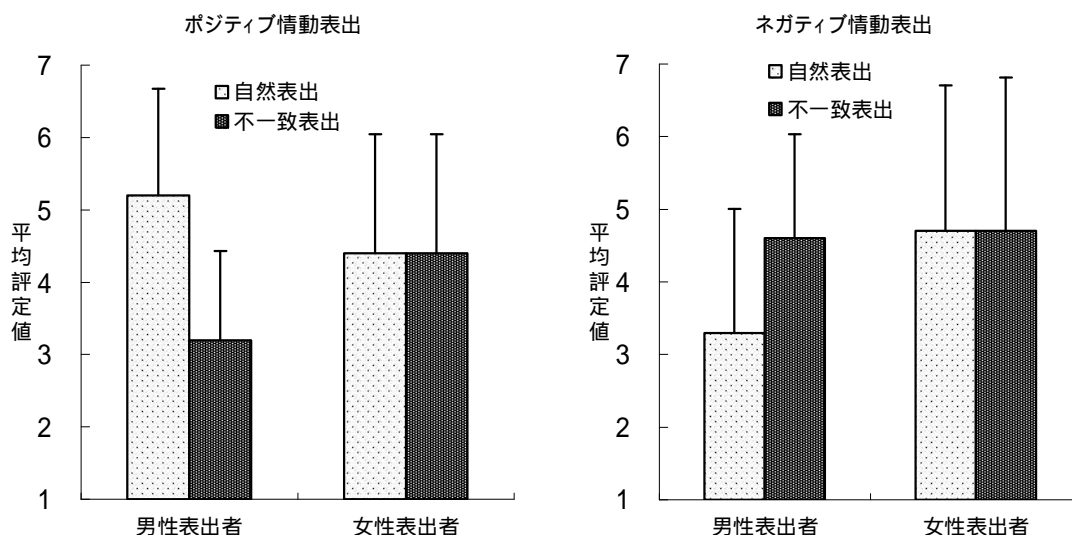


Figure 1 表出者の表情の真実味判断の平均評定値および SD

相関係数を、有意差がみられた項目に限り Table 4 に示す。

男性のポジティブ情動表出に関しては、受け手自身の幸福、表出者の驚き推測および幸福推測、好ましさ、魅力度において正の相関関係が有意であった ($r_s = .53, .46, .47, .67, .55, p_s < .05$)。男性のネガティブ情動表出に関しては、受け手自身の幸福、表出者の幸福推測、好ましさ、信じやすさ、社交性、活動性において正の相関関係が有意であった ($r_s = .54, .60, .64, .69, .59, p_s < .05$)。

女性のポジティブ情動表出に関しては、いずれの項目とも有意な相関関係がみられなかった。女性のネガティブ情動表出に関しては、受け手自身の悲しみ、社交性において正の相関関係が有意であった ($r_s = .47, .60, p_s < .05$)。

考察

本研究では、ポジティブ情動およびネガティブ情動の

不一致表出が、受け手の情動や表出者に対する対人印象判断において、自然表出とどのように異なるのか検討した。その結果、表出者の性別によって異なることが明らかとなった。

ポジティブ情動表出に関しては、男性において、不一致表出によるポジティブ情動表出が自然なポジティブ情動表出よりも、受け手にネガティブな情動や印象をもたらすことが示された。一方、女性においては、不一致表出によるポジティブ情動表出が自然表出よりも悲しみ情動を強く感じていると推測されたが、受け手の情動経験や印象では自然表出との差はみられなかった。ネガティブ情動表出に関しては、男性において、不一致表出によるネガティブ情動表出が自然なネガティブ情動表出よりも、受け手にポジティブな情動や印象をもたらすことが示された。一方、女性においては、不一致表出が自然表出よりも、受け手にネガティブな情動や印象をもたらすこと、自然表出とは異なり嫌悪情動を強く推測させることが示された。

Table 4 表出者の表情の真実味評定値との相関係数

項目	ポジティブ情動表出		ネガティブ情動表出	
	男性表出者	女性表出者	男性表出者	女性表出者
<i>受け手の情動経験</i>				
悲しみ	.32	.17	-.24	.47*
幸福	.53*	-.44	.54*	.01
<i>表出者の情動推測</i>				
驚き	.46*	.03	.07	.10
幸福	.47*	-.31	.60*	.27
<i>表出者に対する印象</i>				
好ましさ	.67*	-.17	.57*	.02
魅力度	.55*	-.06	.37	.03
信じやすさ	.30	.06	.64*	.44
社交性	.31	-.15	.69*	.60*
活動性	.16	-.07	.59*	.01

* $p < .05$

以上の結果には、表情の真偽の見抜きやすさが関わっていると考えられる。表情の真実味評定では、ポジティブ情動表出において、男性のみ、不一致表出によるポジティブ情動表出が自然表出より、本当の表情ではないと判断されやすいことが示された。さらに、男性のポジティブ情動表出は、表情の真実味と、受け手の幸福経験や表出者の好ましさとの正の相関が確認された。つまり、男性の不一致表出による笑顔は偽りであると見抜かれやすく、そのため不一致表出による偽りの笑顔が自然表出による真の笑顔に比べ、ネガティブに機能したと考えられる。一方、女性のポジティブ情動表出では、表情の真実味評定において自然表出と不一致表出との間に違いがみられず、他の各評定との相関もみられなかった。女性の不一致表出による笑顔は、自然表出と区別されることなく同様にポジティブな機能を果たしたと言える。女性は男性よりもよく笑顔を表出する、また、そうすべきだという表示規則があるとされている(Ellis, 2006)。そのため、女性は男性に比べ、笑顔であることが自然であり、笑顔を作ることに長けていたと考えられる。ネガティブ情動表出においては、有意ではないが、男性では、自然なネガティブ情動表出が本当の表情であると判断されにくいようであった。また、表情の真実味評定と、受け手の幸福経験や各印象判断とに有意な正の相関が確認された。不一致表出において抑制しきれなかったポジティブ情動が、受け手に対してポジティブに機能したのかもしれない。

なお、ネガティブ情動表出において、女性による不一致表出がよりネガティブな情動や印象をもたらしたことに限っては、不一致表出において表出される情動の種類が、自然表出とは異なっていたことが一因かもしれない。意図的に表情表出を作り出す場合、自然な表情表出とは異なる

表情筋が動くと言われている(Prkachin, 2005)。表出者の情動推測において、女性では、自然表出では悲しみをより感じ、不一致表出では嫌悪をより感じていると推測されることが示された。女性による不一致表出は嫌悪の情動がより強く表出されていたため、受け手に対しても、怒りや嫌悪を自然表出のときよりも強くもたらした可能性が考えられる。

以上のことから、ネガティブ情動経験時にポジティブ情動を表出することは、受け手にとっては必ずしも悪影響ではないことが明らかとなった。特に女性は、男性よりもポジティブ情動表出の調整に長けており、自然表出と変わらず、受け手にポジティブな影響をもたらすことが示された。ただし、本研究で表出者として用いた映像人物は少数であり、この性差が本研究の表出者に限られた可能性も否定できない。男性であっても表情表出の調整に長けていれば、ネガティブ情動経験時にポジティブ情動表出をすることで、自然表出と変わらず、受け手に対してポジティブに機能するかもしれない。対人場面においてネガティブ情動経験時に巧みにポジティブ情動表出をすることは、より良好なコミュニケーションの実現にとって重要な機能を果たすと考えられる。

一方、ポジティブ情動経験時にネガティブ情動を表出することは、表出される情動の種類によって異なる影響を及ぼす可能性が示唆された。特に女性は、不一致表出をする際に、怒りや嫌悪といった受け手に脅威を与えるような表情表出をしていると考えられる。しかし、ポジティブ情動経験時にネガティブな情動表出をすることが求められる状況は限定的である。例えば、対面相手が自身のネガティブな情動経験について語る時、たとえ自分がポジティブな気持ちであっても、相手への共感を示すた

めに不一致表出をするというものである。そのような状況では、怒りや嫌悪ではなく、悲しみといった共感的な表情を表出することが求められる。ポジティブ情動経験時にネガティブな情動表出をすることが対人場面において有益に機能するには、各状況を考慮した上で、適切なネガティブ情動を表出することが重要であろう。

問題点も残されている。本研究では、不一致表出の表情を撮影する際、表出者に対して、感じた感情と逆の表情を表出するように、と教示をした。ポジティブな情動表出は笑顔が表出されやすいが、ネガティブな情動を表出する場合は、怒り、悲しみなど、どの情動を表出するかによって、表出される表情の特徴が変化する可能性がある。ネガティブ情動表出において、女性表出者の自然表出と不一致表出でもたらされる情動に違いが出たことも、その教示の曖昧さが一因であったかもしれない。今後は、表出する情動の種類を限定して実験を行う必要がある。また、本研究ではあくまで情動調整を行っている人物の映像を見ただけであって、実際の対面状況とは隔りがある。今後は、実際に表出者と受け手の2人を設定した実験を行うことで、より現実場面に近い双方向の状況を再現する必要があると考えられる。

本研究では、ポジティブ情動およびネガティブ情動の不一致表出が、受け手の情動や対人印象判断に及ぼす影響について検討した。その結果、表出者の性別によって異なる影響がみられた。男性は、ネガティブ情動経験時に笑顔を見せても、その表情表出が偽りの表情であると見抜かれやすく、受け手の情動経験や表出者に対する印象判断に悪影響を及ぼす一方で、女性では、表情表出の真偽が見抜かれにくく、自然表出と同様の機能をもたらすことが示された。表情表出による情動調整が、限定的ではあるが、対人的にポジティブに機能することが明らかとなり、良好なコミュニケーションに寄与する可能性が示唆されたことは、本研究の大きな成果と考える。

引用文献

Butler, E. A., Egloff, B., Wilhelm, F. H., Smith, N. C., Erickson, E. A., & Gross, J. J. (2003). The social consequences of expressive suppression. *Emotion*, **3**, 48-67.

Demaree, H. A., Schmeichel, B. J., Robinson, J. L., & Everhart, D. E. (2004). Behavioural, affective, and physiological effects of negative and positive emotional exaggeration. *Cognition and Emotion*, **18**, 1079-1097.

Ellis, L. (2006). Gender differences in smiling: An evolutionary neuroandrogenic theory. *Physiology & Behavior*, **88**, 303-308.

Gross, J. J. (2001). Emotion regulation in adulthood: Timing is everything. *Current Directions in Psychological Science*, **10**, 214-219.

Gross, J. J. (2002). Emotion regulation: Affective, cognitive, and social consequences. *Psychophysiology*, **39**, 281-292.

Harker, L., & Keltner, D. (2001). Expressions of positive emotion in women's college yearbook pictures and their relationship to personality and life outcomes across adulthood. *Journal of Personality and Social Psychology*, **80**, 112-124.

Kunzmann, U., Kupperbusch, C. S., & Levenson, R.W. (2005). Behavioral inhibition and amplification during emotional arousal: A comparison of two age groups. *Psychology and Aging*, **20**, 144-158.

Laurenceau, J., Barrett, L. F., & Pietromonaco, P. R. (1998). Intimacy as an interpersonal process: The importance of self-disclosure and partner disclosure, and perceived partner responsiveness in interpersonal exchanges. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1238-1251.

Lopes, P. N., Salovey, P., Côté, S., & Beers, M. (2005). Emotion regulation abilities and the quality of social interaction. *Emotion*, **5**, 113-118.

野口素子・吉川左紀子 (2007). ネガティブな表情表出のマスクングによる情動調整の特性 日本心理学会第71回大会発表論文集, 969.

大橋正夫・三輪弘道・平林 進・長戸啓子 (1974). 写真による印象形成の研究(2) 印象評定のための尺度項目の選定 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **20**, 93-102.

Poole, G. D., & Craig, K. D. (1992). Judgments of genuine, suppressed, and faked facial expressions of pain. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 797-805.

Prkachin, K. M. (2005). Effects of deliberate control on verbal and facial expressions of pain. *Pain*, **114**, 328-338.

Richards, J. M. (2004). The cognitive consequences of concealing feelings. *Current Directions in Psychological Science*, **13**, 131-134.

Richards, J. M., Butler, E. A., & Gross, J. J. (2003). Emotion regulation in romantic relationships: The cognitive consequences of concealing feelings. *Journal of Social and Personal Relationships*, **20**, 599-620.

Robinson, J. L., & Demaree, H. A. (2007). Physiological and cognitive effects of expressive dissonance. *Brain and Cognition*, **63**, 70-78.

Sato, W., Noguchi, M., & Yoshikawa, S. (2007). Emotion elicitation effect of films in a Japanese sample. *Social Behavior and Personality*, **35**, 863-874.

Srivastava, S., Tamir, M., McGonigal, K.M., John, O. P., & Gross, J. J. (2009). The social costs of emotional suppression: A prospective study of the transition to college. *Journal of Personality and Social Psychology*, **96**, 883-897.

註

- 1) 実験の実施および論文執筆にあたり多大なご協力とご助言をいただきました。京都大学教育学研究科の野村光江氏、布井雅人氏に心より感謝いたします。なお本研究の一部は、日本心理学会第72回大会において報告された。

**The effects of emotion regulation
on the recipient's emotions and impressions of the regulators:
Focusing on expressive dissonance**

Motoko NOGUCHI (*Graduate School of Education, Kyoto University*)

Sakiko YOSHIKAWA (*Kyoto University Kokoro Research Center*)

This study examined the effect of expressive dissonance on the recipient's emotions and impressions of the regulators. Expressive dissonance indicates that the regulators regulate their emotional expressions to convey an emotion incongruent to what they really felt. After watching the individual videos of the expressions made by two male and two female regulators (each conveying two dissonant and two natural expressions), 20 Japanese participants were asked to rate their own emotional experiences and their impressions of the regulator and to infer the regulator's emotional state and the verisimilitude of the regulator's emotional expression. The male faked smiles rather than their genuine smiles were more easily rated as fake and negatively affected the participants' emotional experiences and impressions. In contrast, the female faked smiles were rated as verisimilar and had the same effect on the emotional experiences and impressions of the participants when compared to their genuine smiles. These results suggest that expressive regulation has some degree of positive social function and can contribute to the development of better communication.

Keywords: emotion regulation, expressive dissonance, emotional expression, emotional experience, impression.